

編集後記

日本味と匂学会に入会して20年近くが経過しました。その間、学会誌を幾度となく手に取ってきましたが、本誌の編集に携わる先生方がどのような思いで誌面を作り上げてこられたのかにまで思いを巡らせることはありませんでした。実際に自らが編集業務に携わる機会を得て、これまで本誌を支えてこられた先生方のご尽力の大きさに、改めて深い敬意を抱いております。

本号においても、多彩で興味深い原稿が掲載されています。なかでも、荒井綜一先生のご逝去に際し、そのご功績を偲ぶ追悼文が掲載されております。荒井先生は、機能性食品という概念を確立され、基礎から応用に至るまで幅広い研究分野において多大な業績を残されました。私自身も、わずかながら先生よりご指導を賜る機会を得ましたことを、大変光栄に存じております。ここに謹んで先生のご功績に深く敬意を表するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(京都女子大学 成川真隆)

本号には、2025年学会賞を受賞された廣田順二先生による巻頭言をはじめ、多くのご寄稿をお寄せいただきました。荒井綜一先生への追悼記事、特集6報、総説2報、第58回大会優秀発表賞受賞寄稿5報、海外だより1報、研究室紹介1報、技術ノート1報、他学会・大会紹介としてプレISOTシンポジウムの紹介1報、「若手の会」1報、書評3報、60回大会(岩手)のお知らせと、多彩な内容です。荒井先生のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、ご多忙の中ご執筆くださった著者の皆様に、深く感謝申し上げます。

「味覚・嗅覚の臨床最前線(診断、治療、研究)」では、味覚と嗅覚における診断・治療・研究の各側面について、第一線で活躍されている先生方により、最新の知見が体系的にまとめられています。特集と技術ノート「嚥下機能評価の検査技術」を併せますと、今号はいつもより若干医療色の濃い構成となりました。けれども、すべての記事をご覧になると、臨床・基礎・産業の各分野から「味と匂」について多角的に捉えた充実した内容となっていると感じていただけるものと存じます。私にとって「日本味と匂学会雑誌」の好きなのところの一つは、この読後感にあります。また、今号の書評も大変興味深い内容です。

本号が皆様にとりまして、新たな発見や交流のきっかけとなりましたら幸いです。

(明海大学 溝口尚子)